

日本で必要とされるメディアとは ～新しいジャーナリズムへの挑戦～

1A143070-9 塩川菜摘

パソコンやスマートフォンがテレビや新聞に取って代わる昨今では、今までのようにメディアがニュースを選択し意味のあるように構成するゲートキーパーの役割を担うことがほとんどなくなった。その分ニュースの受け取り手である個人に情報の取捨選択が求められる。情報取得の形態が変化してきている中で、必要となるのは新興メディアなのか。既存メディアの進化か。それともメディアに留まらないもっと大きな枠組みの改変なのだろうか。

今回はICIJによるパナマ文書の調査報道に携わられた共同通信社の澤康臣氏へのインタビューを通して、こうした問題について考察していきたい。パナマ文書の公表は、非営利メディアや調査報道が活発に行なわれているアメリカにおいても大きな成功例である。日本より進んでいると言われるアメリカの新興メディアとともに実際に活動した澤氏は、日本のメディアのこれからについてどのように感じているのだろうか。



澤康臣（さわやすおみ）氏

1990年共同通信入社。主に社会部で報道に携わる。通算7年にわたり司法を担当した他、人権、平和、メディアなどをテーマに取材。その後東京支社編集部、外信部などで経験を積み、現在は特別報道室次長を務める。著書に「グローバル・ジャーナリズム 国際スクープの舞台裏」(岩波新書)などがある。

パナマ文書とは...

中米パナマの法律事務所から流出した約1150万件の電子ファイル。南ドイツ新聞が匿名の人物から入手し、ICIJを通じて約80カ国、約400人の記者が共有し、取材した。当文書の公表により、各国指導者らのタックスヘイブン（租税回避地）関与の実態が暴かれた。

ICIJ（国際調査報道ジャーナリスト連合）とは...

1997年に発足した、世界65カ国に住む約190人のジャーナリストが共同で調査報道を行うための非営利の報道機関。当機関はパナマ文書以前にもタックスヘイブンに関する取材を続けてきたが、「パナマ文書」報道で世界的にその名が知られるようになった。今年4月には米国の優れた報道に贈られるピューリッツアー賞を受賞。「6大陸にまたがる記者たちの協働で、タックスヘイブンの隠された構造と世界的な規模を明らかにした」との評価を受けた。

---Q. パナマ文書に関わった経緯は？

もともと早稲田大学で知り合ったシッラ・アレッチさんにお誘いいただきました。具体的な中身は教えてもらえず、ICIJの国際的な調査報道プロジェクトに興味があれば参加しないかと言われました。私は記者なので当然興味がないわけではなく、すぐに上司に相談したところ、このコラボレーションには大変意味があるだろうと、社を掲げて共同通信社として参加することになりました。

---Q. どのような役割を果たしましたか？

地元の国のことを地元のメディアが分担をして調べるのが今回の方針。日本メディアとしてやるべきことは、日本関係の案件を調べること。パナマ文書の中に日本の関係者、個人、法人がいないかをチェックします。日本関係と思われるリストがまとまったら、一つ一つ公開資料や手元のデータで詳細を調べ誰であるかを特定。そこからニュースとして必要なものを判定し、ニュースになりそうなら取材を進め、最後には本人にも当たります。そこで初めてニュースにできるんです。

---Q. 日本メディア代表としての責任を感じましたか？

日本からは共同通信と朝日新聞のみの少数精鋭でやっていたので、確かに責任感みたいなものはありました。自分が気付かなければ問題はなかったことになり見過ごされてしまうので、特別報道室の仲間と一緒に見落とさないよう気を配りました。



---Q. 活動内で、驚いたこと

や感動したことは？

ICIJのことをある程度は知っていたけれど、自分がその中に入ってみると驚くことばかりでした。報道解禁まではプロジェクトの存在自体秘密のため、メールではなく暗号化されたPGPというツールでのやり取りになります。世界中の記者が厳重に守られたSNSに集まり情報交換を行います。暗号化されたFacebookのようなものですかね。そこに記者が新着情報やアドバイスを求める声を投稿します。2.6テラバイトという巨大なデータリークにも驚きました。

あとは情報同時解禁で秘密が守られたこと。私たち記者は、普段は誰かに秘密を漏らさせる仕事をしているので、人間ってというのは口を破るものってみんな思っているんです。秘密が守られないんじゃないかって、みんなきつと心のどこかにはあったと思うんですが、出来ちゃいましたね（笑）。

---Q. 日本との違いはありましたか？

もちろん大規模なプロジェクトだし調査報道なので、日本とは違うこともありました。それよりも同じだと思った部分の方がたくさんありました。物の考え方もそうだし、仲間意識を強く感じましたね。例えば、調査報道ではプロジェクトの存在自体が秘密なので、「これについてどう思いますか」という直撃取材はできません。しばらくは一般的な話を専門家から聞いたり、公表資料だけもらったり。当事者に当たるのは最後の最後になります。なかなか尻尾は掴めない中、地道な取材を続けてやっと掴んだ情報を、ネット上でみんなに共有するときには「じゃじゃ〜ん!!! 😊」って効果音付きでテンションの上がった投稿をするんですよ。その気持ちはとってもよく分かりますね。



他にも、ここ詰めないとまずいんじゃないかななどのアドバイスも、「ですよね!」と思うものばかりで。ジャーナリズムの原則、取材の手法、記事にする

には何が必要か、などの根本のところは当たり前だけど、各国の記者に共通します。みんな同じようなところで苦労してるんです。再確認し、嬉しくもあった発見でした。

---Q. 今回のような大規模な調査報道は日本で可能？

これほどの規模の調査報道の国内版は、確かに簡単ではないとは思いますが。経験もないですし。でも逆に今回、朝日とは事実コラボレーションできたわけですし、最近ではNHKも加わって進められているので、可能性は十分にあると思います。やろうと思えば強いリーダーシップや環境整備が必要ですが、手法と目標の共通点があれば大丈夫。懸念されがちな資金面も、日本の大手のメディアは他の国の新聞などと比べると経済的にまだ元気があるので、希望はあるんじゃないでしょうか。

---Q. 日本におけるメディア同士のコラボレーションは？

うちも加盟新聞社に記事を配信しているから、ある意味でコラボレーションを基盤にしているとも言えるのかな。基本的に、日本は欧米に比べて社内の人だけで用が足りてしまうから外部執筆者が少ないんですよ。それがコラボレーションが少ない理由ですかね。

---Q. 大手メディアでの仕事は？

圧力をかけられたり、記事を書きにくいと思ったことはほとんどありません。むしろ自分の力不足で悔しい思いをすることが多いかな。メディアには限界があるっていう実体のない空気が私自身すごく嫌いで、勝手にどんどん大きくなっていってしまうのが怖いです。実際言われているほど広告などの権力に左右されていないと感じています。懐疑的な目は確かに必要だけど、批判することが目的になってしまっただけは元も子もないと思いますね。

---Q. 大手メディアのメリットを挙げるとしたら？

会社を辞めた同僚から、逆に大手の方が自由だったという意見を聞くことができます。やっぱり小さい組織で仕事をするとう注文がつきやすいので、採算度返しでいい！という記事は余裕のある大きい会社しかできないことだと思います。私が経験したわけではないので分かりませんが。しっかりした基盤があれば信念を持って書きたい記事だけ書けるけれど、なかなかそうはいかないんじゃないかな。

---Q. 澤さんの目指すところは？

名刺にも書いてあるように、「In-Depth」、深堀ニュースと、「WHY」を追求する調査報道を通して、社会の深い問題、権力や大企業の問題や不正に近づけるように記事を書き続けていきたいと思っています。弱い人、力がない人の声にならない声を見つけて代弁し、問題提起していきたい。その力で少しでも世の中を変えられたら、素敵ですね。

---Q. 今後の日本のメディアに必要なのは？

取材のスキル、手法、知識を身につけて現場を力強く面白くしていくことですかね。それがもっとも必要だと思っています。早稲田のJ-Schoolのジャーナリズム教育はもちろんその一環であるし、同時に報道現場のスキルと知識を上げるために報道実務家フォーラムというのも開いています。良い特ダネ、報道、企画をした人と呼び、どうすれば取材が上手くいったかの体験を共有してもらうものです。

メディアというよりも、日本全体の問題として情報開示の遅れがあります。異常な個人情報マインドが蔓延し、誰も取材に答えてくれない。でも事実確認は個人にしないと取材は次に進めない。こんな匿名社会は日本特有です。裁判の情報公開もされてはいるものの、手続きにはかなりの段階を踏まなければなりません。イギリスやアメリカに比べると、誰に取材すればいいかわからない日本の状況は極めて大きな問題だと思います。映画「スポットライト」でも、取材は新聞の切り抜きを探したり、裁判の記録を見返すことから始まりましたが、それは日本では難しい。個人情報は政府だけが持っていて、みんなそれでいいと思っている。

---Q. 今後のNPOメディアに必要なのは？

なかなか難しいですね。でも記事を書き続けて発表の場を広げていくことだと思います。ジャーナリズムは特ダネを書くのが一番いい。それはどんなメディアにも共通して言えることです。いくらハイレベルでもつまんなかったらダメ。言いたいことを言うんじゃなくて、知りたいことを提供する。知りたいことと言うと芸能ニュースばかりになってしまうと言う人もいますが、きっと誰でも世の中どうなっているのか、どうなっていくのか本当は知りたいはず。僕はそう信じています。ただ大事なことを面白く伝える技術って結構難しい。情熱や

想いだけで終わらない記事を書くために技術をつけないといけない。空回りしてしまう前に事実をしっかり掴むパワフルな記者が必要だと思います。

<取材を終えて>

日本には、アメリカのNPOメディアの資金源となっている寄付金の出資者がいなく、大手メディアの力が強い。おそらくその構図をすぐに変えることは難しいだろう。新興メディア、NPOメディアにこれからのジャーナリズムを期待するのも良いが、既存のメディアの中でもまだまだ改善できる点がある。さらに日本特有の匿名社会という壁がメディアの取材を妨げているという問題も存在する。しかし、ジャーナリズムの原則や記者の信念は世界共通なものであると分かり、そこまで日本のメディアを悲観的に見る必要もないのではないかと感じた。重要なのは、真面目なニュースや、拒否反応を起こす人がいるようなニュースをいかに興味深く作るかである。その一つの戦略として、マルチプラットフォームがあげられる。スマートフォン、パソコン、アプリ、ゲームにアニメ、音楽。様々な形や媒体からニュースを発信することでより多くの人に興味を持ってもらえる可能性が広がる。これからの日本のメディアがどう進化を遂げていくのか、あらゆる可能性を信じ、期待したいところである。